

武士の本拠の成立について

—考古学的資料をとおして—

浅野晴樹

はじめに

北武蔵の古代の集落は、その規模の違いはあれ、台地や低地のみならず丘陵など、各地で確認することができた。しかし、それが10世紀の後半から11世紀に至ると著しく減少し、わずかばかりの集落が児玉や比企などの内陸に確認されるのみとなった。このような集落の減少は、北武蔵に限ったことでなく、坂東全体にみられる姿なのである。

再び、集落遺跡が確認されるようになるのは、12世紀中葉のことであった。ただ、それは集落遺跡といっても古代にみられたような竪穴住居や掘立柱建物が集まったものではなく、掘立柱建物を中心とするものであった。

そして、その遺跡から出土する遺物には、11世紀までとは大きく異なる二つの特徴があった。一つが、新たに京都の影響を受けた手づくねかわらけの出土である。そして、二つ目が中国製の白磁碗・青磁碗・白磁水注、国産陶器の渥美や常滑の甕や片口鉢など搬入の陶磁器が増加することであった。

このように変化した遺跡とそこから出土する遺物を見る限り、古代とは明らかに異なるもので、いずれも支配層の住まいと考えられるのである。

そこには、①古代以来の坂東の荒廃への復興事業の担い手として、②京都系の手づくねかわらけに象徴される京都とのつながり、③中国陶磁などにみられる広域流通品を得ることのできる富の蓄積(流通とのかかわり)などを背景とした武士のすがたをみることができるのである。この三点を念頭に武士の本拠について考えてみることにしたい。

1 考古学からみた武士の本拠について

(1) 秩父氏と嵐山町周辺

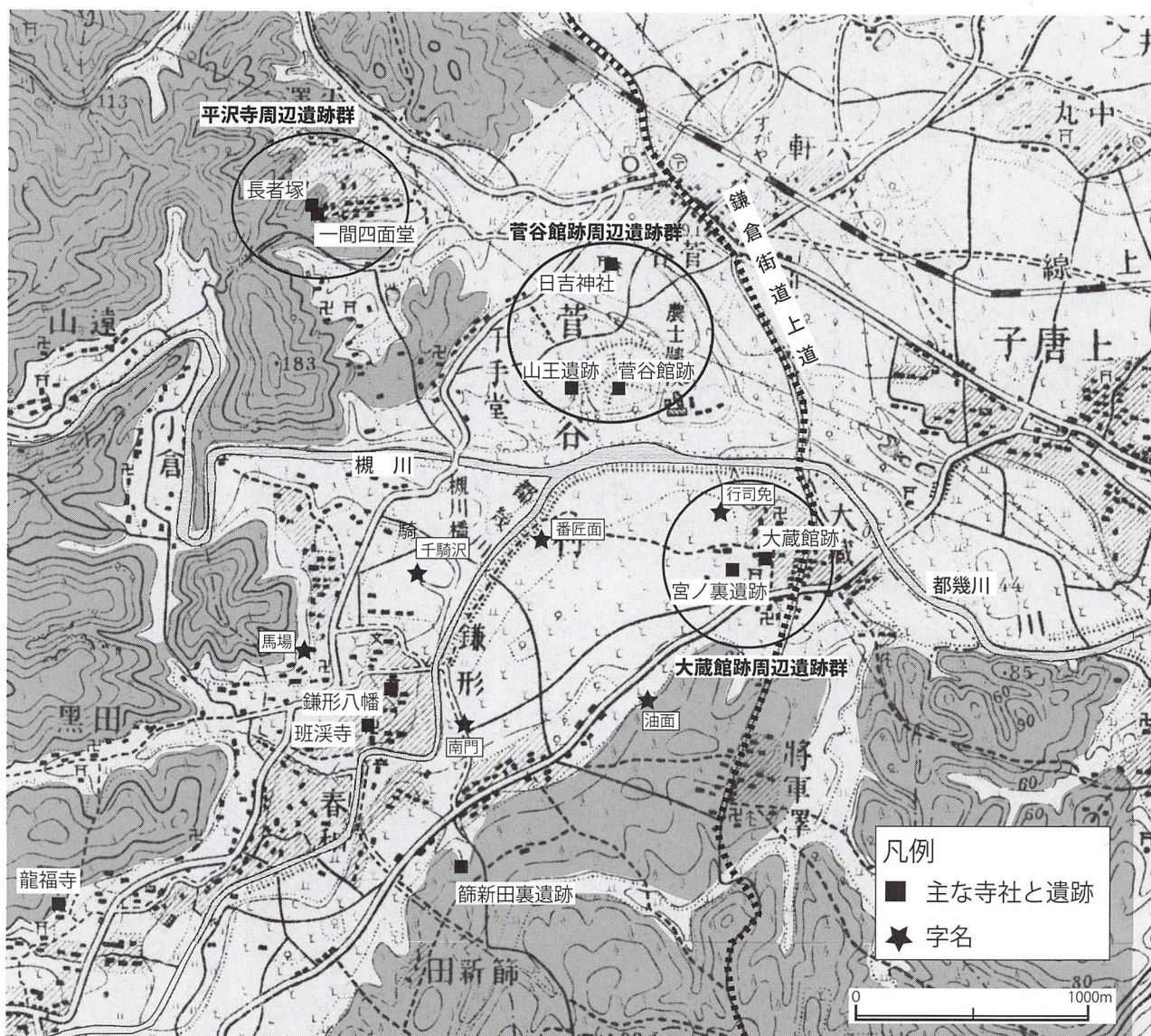
現在の比企郡嵐山町の平沢、菅谷、大蔵の地は、文献史学の研究を中心に秩父氏との関係が多く語られてきた。まず一番北に平沢寺があり、そこから南東方向1.6キロメートルに菅谷館跡を中心とする遺跡群があり、その菅谷館跡から南に1キロメートルに大蔵館跡を中心とする遺跡群がある。この三遺跡群の考古学的成果を簡単にまとめてみたい。

① 平沢寺遺跡群

秩父氏の聖地ともいわれるところである。

江戸時代に確認された長者塚から久安4年(1148)銘の経筒が出土したことが考古学的な資料の最初であろう。

そしてこの20年ほどの間に、数度にわたり発掘調査が実施され、遺構では現平沢寺の南の谷から一間四面堂跡が確認され、その一間四面堂跡から柱状高台と手づくねかわらけ、ロクロかわらけが、平沢寺の墓地造成では大形の手づくねかわらけの出土が確認されている。



第1図 秩父氏と本拠空間

発掘調査された一間四面堂跡の造営年代についてであるが、出土した柱状高台、手づくねかわらけ、ロクロかわらけなどが12世紀中葉のものであることから、一間四面堂の造営もその年代ないしはそれ以降のものと推測されている。

一間四面堂跡の東には池があったと伝えられることから臨池伽藍の存在を想像させる。さらに池跡の北側、白山神社の参道脇には、周囲の水田から掘り出された礎石として使われた大石が集められており、周辺に大規模な礎石建物があつたことを推測させる。そして、周辺の丘陵などには比丘尼屋敷、御山坊、大日山、出城坊などの字名を確認することができ、時代が下がるとともに、周辺地域に堂などが広がっていったことをものがたっている。

② 菅谷館跡周辺遺跡群

畠山重忠が、武蔵国菅谷館に引きこもって、反乱しようと考えていると噂があることが、吾妻鏡文治3年(1187)11月15日条に記されている。これが菅谷館の初見である。現在みられる菅谷館跡は戦国時代のもので、重忠の頃の館に重複するようにつくられたものといわれている。

菅谷館跡の西側に隣接する山王遺跡には平坦に造成された面があり、道路工事に伴う発掘調査では12世紀中葉の手づくねかわらけ、常滑鉢が出土した(村上2008)。さらに、その北側の鎌倉街道跡の調査では街道跡と伝えられた遺構が堀であることがわかり(埼玉県立歴史資料館1983)、その堀は山王遺跡の構堀のようである。このような調査成果から菅谷館跡の西に堀に囲まれた館があったことは間違いなく、吾妻鏡の文治3年の記事の「菅谷館」は、菅谷館跡からこの山王遺跡周辺に比定することで問題はないであろう。

菅谷館跡の北側には菅谷神社(日吉神社)があり、菅谷館跡の東には「元宿」という字名が残っていることから、館とそれを取り巻くように宗教施設や集落のある空間をそこにみいだすことができるのである(水口2016)。

③ 大蔵館跡周辺遺跡群

菅谷館跡の南、都幾川を挟んで1キロメートルには、大蔵の集落がある。この大蔵は、秩父重隆が館を構えたと伝えられるところである。

その集落内での発掘調査では、方形の溝に囲まれた区画が確認され、その中から常滑甕、渥美甕、ロクロかわらけなど12世紀中葉から13世紀にかけての遺物が確認された。

この大蔵館跡の西隣に宮之裏遺跡がある。この遺跡からは、柱状高台や瓦が出土している。瓦は当時、寺院以外には使用されることはまずないことから、この遺跡は寺院跡である。柱状高台は、平沢寺遺跡の一間四面堂から出土したものと同時期で12世紀中葉のものである。

大蔵館跡の西方、約2キロメートルにときがわ町節新田遺跡が所在する。この遺跡の調査では、溝跡からわずかな手づくねかわらけが確認されたのみであるが、その手づくねかわらけは、先に説明した菅谷館跡に隣接する山王遺跡とほぼ同じころの12世紀中葉のものであった。このような手づくねかわらけが確認できたことは、この付近に12世紀中葉に遡る館があった可能性が高いことをものがたっている(石川2016)。

④ 三遺跡群のまとめ

以上の三か所の遺跡群の考古学的な事実について確認を行った。それでは、この三か所をどのように関連付けて考えたらよいであろうか。成立の変遷であるが、それぞれに関連する人物から考えてみよう。平沢寺遺跡群は経筒の銘から秩父重綱、菅谷館跡周辺遺跡群は吾妻鏡の記事から畠山重忠、大蔵館周辺遺跡群は大蔵合戦の背景から秩父重隆、源義賢と関連づけられ、単純にその生存時期を考えれば、平沢寺周辺遺跡群→大蔵館跡周辺遺跡群→菅谷館跡周辺遺跡群となるであろうか。

しかし出土遺物の中の手づくねかわらけと柱状高台をみると、三か所とも12世紀中葉に位置づけられ、遺物からは前後関係を明らかにすることはできない。さらに平沢寺の久安4年銘の経筒の存在、大蔵合戦という歴史事象などから考え、三か所とも12世紀中葉には居館や寺社が成立していたと考えても問題はない。

落合義明は、重隆が大蔵に館を構えた理由として平沢寺の経塚との位置関係を挙げている。経塚の埋納される場所は、霊地や聖地とされるところであり、大蔵館は平沢寺のある丘陵部より台地におりてくる南東の方角に築かれているので、まさに館側から見れば西方浄土の方角である。そのような意識を持った秩父重綱の方縁、重隆の母は重綱の威徳を偲びつつ、聖地の近

くに大蔵館を築いたと考えられるという(落合2012)。

このような落合の考えは賛同できなくもない。しかし、最初に述べたように、平沢寺と大蔵館の距離は2.6キロメートルを測り、大蔵館跡からは菅谷館跡は臨めても、平沢寺はまったくみることはできない位置関係にあり、落合のいうような考えをすべて首肯はできない気もするのである。それならば、なにゆえに、このような広がりを持って三つの空間が成立したのだろうか。

平沢寺遺跡群と他の二つ空間とでは、成立の背景が異なることがまず挙げられるのではないだろうか。野口実を始めとして多くの研究者が主張するように、大蔵や菅谷が選ばれた理由としては第一に交通の要所であったことがあげられている(野口2003)。大蔵の直ぐ南の南比企窯跡群では、須恵器や瓦が生産され、その製品は国分寺に運ばれていた。そのような歴史的背景から、大蔵から国府方面に古代以来の街道があったことは疑いのないことである。加えて、入間川水系の一つである都幾川が大蔵の北に流れていることは、この地が街道と河川交通の交差する要所ともされるのである。このような交通上の利便性の基に大蔵館跡周辺遺跡群と菅谷館跡周辺遺跡群は、本拠空間の適地として選択されたと考えられるのである。ただ、一つ気にかかる点は、当時と状況が違つかもしれないが、現在の大蔵辺りの都幾川は水量も少なく、河川交通を想像させるような状況ではないことである。

さらに峰岸は、秩父氏が古代国家の枠組みである国衙の役人となるとともに、牧を経営してその管理人となって馬を飼育し、馬の売買や輸送にかかわることによって富を蓄積してゆくという(峰岸2008)。その富の蓄積の過程でより活躍しやすい場所を探して、現在の嵐山の地に本拠が構えられたものであろう。

冗漫のそしりを免れないかもしれないが、峰岸の考えを受け、大蔵周辺の地形を思い浮かべてみると、大蔵の西側には耕地が広がり、さらにその西に都幾川が流れ、二瀬で東に方向を変え、大蔵の方に流れる。南は篩新田遺跡の所在する丘陵があり、これらに囲まれた空間が馬の放牧地ではないかと想像させるのである。

周辺に残る字などを調べると、都幾川と槻川の合流地点から南に500メートルで「千騎沢」、千騎沢の南西には「馬場」の地名もある。千騎沢の南には「南門」と言う地名がある。この「南門」が何を意味するのかはよく分からないが、牧に関係したものであろうか。そのほか、「行司免」「番匠面」「油面」などの中世に遡ると思われる字名が、先の空間を囲むようにあることも気にかかる。

いずれにしても、流通・交通を考えるうえで有利な場所であることが大蔵館周辺遺跡群、菅谷館跡周辺遺跡群に本拠が成立したと考えることが合理的であろう。そしてその時期は重綱段階のことであったかもしれない。

それならば平沢寺はなぜ選ばれたのか。12世紀中葉以降、関東各地に臨池伽藍をともなう館空間が造られており、平沢寺もその一つと言われている(齋藤2006、村上2008)。臨池伽藍を前提とするならば、谷戸(谷津)などの地形で湧水などがある地形が選ばれる。そのような類例を含め、武士の本拠空間の事例を二つほど紹介したい。

(2) 児玉党庄氏と浅見氏の本拠について

武士の本拠の好例として、早稲田大学本庄キャンパスにある大久保山遺跡がある。この遺跡は庄氏の本拠と考えられている。

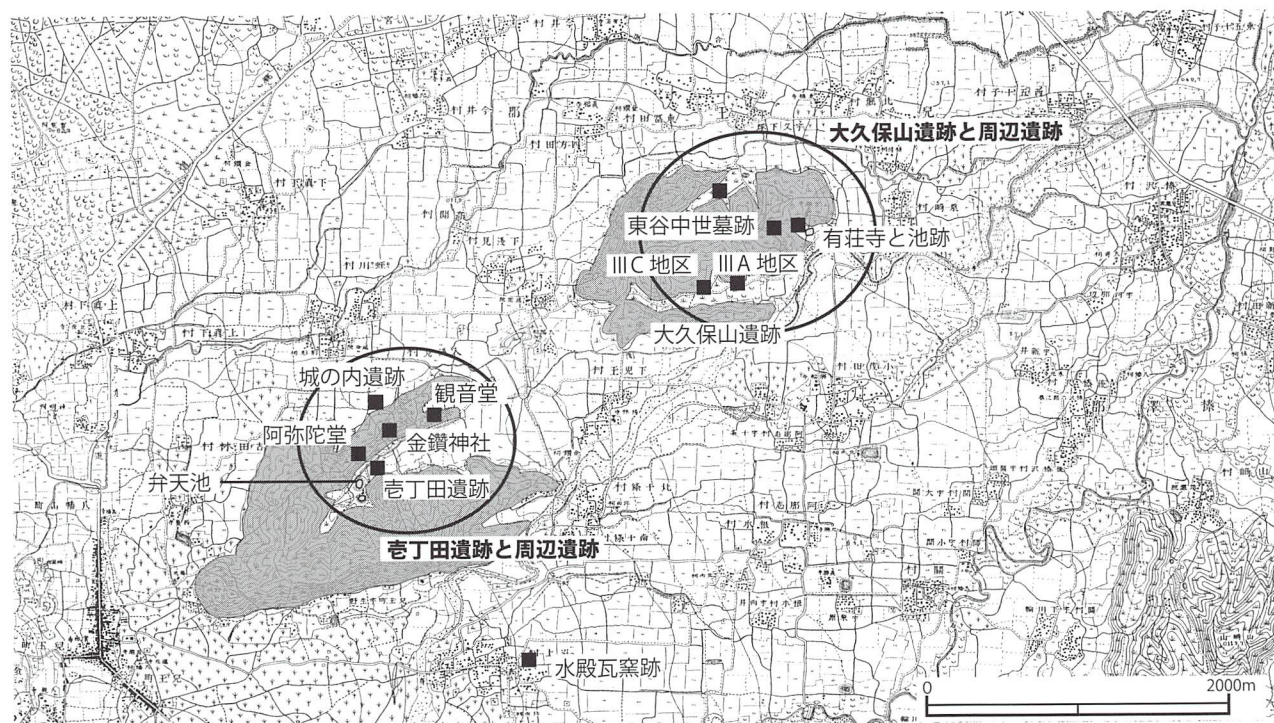
遺跡は、丘陵の中央部付近の東に開く谷津の北側と東側斜面を中心に展開していた。斜面には、浅い溝により方形に区画された屋敷(居館)がつくられ、その屋敷のなかには惣領の住まい、周囲には従者の住まいや厩と思われる建物が配置されていた。この屋敷の西奥には二間四方の仏堂か社を思わせる建物が確認されている。

そして、屋敷の北東の谷の入口には近年まで池があり、池の西の丘陵斜面は平坦に造成されており、ここに堂が建てられていたと推定される。その建物は園地とセットである阿弥陀堂である可能性が高い。さらに、西の丘陵斜面には中世墓があり、12世紀後半から14世紀にかけての常滑壺や古瀬戸瓶子などの蔵骨器が出土している。

このように大久保山遺跡は、屋敷が単独であるのではなく、周辺の寺院や墓地などと一体となって存在したことが明らかになったのである。そして、その本拠の屋敷は、出土陶磁器の年代などから推測して12世紀中葉には確実に成立して、幾度かの造成と移動を経ながら14世紀まで継続していたのである(荒川2003)。

大久保山遺跡の西の入浅見の生野山丘陵一帯は、庄氏一族である浅見氏の本拠と伝えられるところである。先の大久保山遺跡と類似した地形に、浅見氏の本拠の一つではないかと思われる壺丁田遺跡がある。遺跡の主体となる時期は出土遺物から13世紀以降であるが、12世紀に遡る常滑片口鉢、中国陶磁を含んでいる。

生野山丘陵の東に大きな谷が入り込んでおり、その谷の奥に弁天池と呼ばれるため池があり、その池の東側に確認された方形館が壺丁田遺跡である。この館の北側の丘陵には阿弥陀堂、観



第2図 児玉党庄氏と浅見氏の本拠空間

音堂、金鑽神社がある(恋河内1998)。

大久保山遺跡とは館や寺社の配置に異なりがあるが、館と信仰の対象である寺社、さらには弁天池が臨池伽藍の可能性もあり、大久保遺跡同様の武士の本拠空間をそこに見出すことができるのである。

(3) 熊谷市下田町遺跡

熊谷市津田にある下田町遺跡からは、和田吉野川の旧河道と思われる河川跡とともに、その河川跡の右岸(南)から12世紀中葉から後半に至る館跡が確認され、左岸(北)からは鎌倉時代から室町時代の宿(津)跡が確認された。

① 武士の本拠としての下田町遺跡

河川跡右岸からは堀や溝など屋敷を区画したと思われる遺構が確認されたが、それらの遺構はいずれも調査区外に延びており、どのような建物や施設があったかはわからなかった。ただ、その堀・溝から12世紀中葉から後半の土器・陶磁器が大量に出土したのである。なかでもかわらけは破片数で1,200点を超えていた。もう少しこの遺跡の性格について検討してみよう。

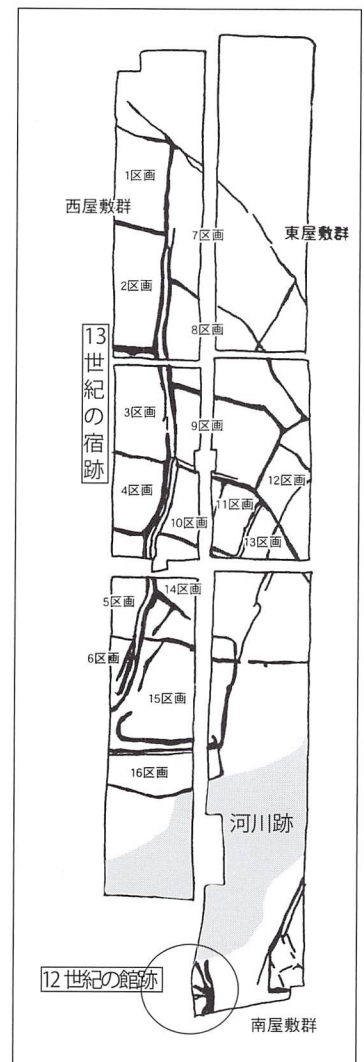
下田町遺跡は、古墳時代から平安時代においても継続的に集落が営まれており、各時代の竪穴建物や掘立柱建物などが確認され、それらの遺構からさまざまな遺物が検出されている。古代集落の溝跡からハマグリの貝殻が検出されていることは注目に値する。このような海産物があることは、とりもなおさず遺跡と東京湾の間に物流があり、その手段として和田吉野川を利用した河川交通がすでに古代にあったことをものがたっている。

さらに遺跡の南約5キロメートルの吉見町西吉見に東山道武蔵路と思われる遺構が確認されている。目を北に向けると現在の熊谷市上之から中条には古代の大集落が広がっている。吉見で確認された東山道武蔵路ないしはその支道が、下田町遺跡を通過して上之や中条の大集落につながっていた可能性は高い。この線上の荒川の南には、元徳3年(1331)7月12日付「武蔵国男衾郡小泉郷在家注文」にある小泉郷が位置する⁽¹⁾。このような位置関係から下田町遺跡は、古代から河川交通と陸上交通の交差する交通の要所として発達したものと考えられるのである。

後に詳しく述べるが手づくねかわらけの出土は、武士の館であることをうかがわせる。以前、この遺跡については開発の拠点としての一面があることを述べたが(浅野2010)、それだけでは不十分であったことは訂正したい。

② 宿(津)としての下田町遺跡

鎌倉時代に至ると河川跡の北側には、街道に沿って連続する方形の区画が確認された。宿の規模は、北の区画から河川跡まで



第3図 下田町遺跡の模式図

270メートルほどの長さであった。調査区の中央付近に両面側溝をもつ幅1.5メートルの道路があり、その道の両側に溝で区画された屋敷が連続してつくられていた。大きなものは半町四方ほどの規模で、区画内には多数の井戸跡が検出し、そのなかから陶磁器類や漆器が確認された。その遺物内容から武士クラスの住まいであったことはまちがいない。そして屋敷は、北に行くほど遺構、遺物も少なくなる傾向にあり、宿内の屋敷に階層差があることがわかる。もう少しいえば北の区画は在家の集落の可能性も考えられる。

出土遺物の時期や量などから、この宿の最盛期は13世紀中葉から後半であり、その後しだいに衰退してゆき、15世紀前半ごろに消滅する。

下田町遺跡には、12世紀の武士の館と13世紀以降の宿(津)の二つの空間があることを紹介したが、このように街道沿いに連続する空間が確認された遺跡は、郡山市荒井猫田遺跡、下野市下古館遺跡、毛呂山町堂山下遺跡など各地に認められ、その多くが宿や市と考えられ、いずれも13世紀代に成立をみる。下田町遺跡の河川北側の連続空間もそのような遺跡と同様に宿と考えてよいであろう。

(4)本拠空間の成立への二つの可能性

近年の武士論研究は、中世成立期あるいはそれより以前から、武士が流通・交通に深く関与していた事実について、多くの実証的成果が得られている。そのため、武士の性格を農業経営者や開発領主に純化してとらえることはできないと高橋に厳しい批判を受けたことがある(高橋2014)。私自身、農業経営者や開発領主に純化して発言をしたつもりはないが、言葉が足りなかったようである(浅野2010)。高橋の批判は甘んじて受けるものである。

その高橋の批判に対して、すべて反論するような力を持ち得ていないので、今回の報告では、考古学的な武士の本拠のあり方を整理することで、高橋の批判の一部に答えたい。そしておりを見つけて批判には答えていきたいと思う。

本拠空間として、まず取り上げた菅谷館跡周辺遺跡群と大蔵館跡周辺遺跡群、下田町遺跡などは、古代以来の街道上に形成された点で共通することなどから流通・交通に深く関与したなかに本拠が成立していったことはまちがいないであろう。

大久保山遺跡群と壺丁田遺跡は、非常に類似した谷地形に館が成立していた。二つの遺跡の南側には水殿瓦窯、そのほか周囲には多くの中世遺跡が点在することから、周辺に街道が走っていたことは明らかである。ただ、大蔵館跡周辺遺跡群や下田町遺跡のように街道と推定されるルート上には両遺跡とも存在はしておらず、交通・流通にかかわる遺跡とは決めることはできない。

本拠空間をつくるためには、いずれの場合も第一に考えなければならないことは水源の確保である。齋藤も想定しているように大久保山遺跡の場合は谷の奥にため池が想定でき、壺丁田遺跡には今もため池がある。谷地形ではないが浅羽氏の場合は河川灌漑用水があり、小代の場合は本拠周辺の崖線に湧水を多数認めることができるのである(齋藤2006)。

この時代、北関東では浅間山の噴火による被災地の復興と再開発という大きな問題を抱えての荘園が形成されてゆくという特殊な状況にあった。特に、児玉地域の支配者であった児玉党

にとって本拠の復興は急務であった(鎌倉2016)。そのとき、古代以来の条里水田の再生には多くの労力と時間が必要であったことから、狭い谷間ではあるが、給排水の整備という点ひとつとっても谷津の開発は条里水田の復興よりもはるかに容易なことであったはずである。

東国における中世前期の館をめぐる景観を図式化すると、館+寺院+先祖墓+氏神となる。これは京都の白河・鳥羽などの摂関家や院御所の構成であった御館+御堂(浄土庭園付)+先祖墓+氏神の景観を引き継ぐものといわれている(小野2004)。

このような小野の示した景観が、坂東において考古学的に証明された最初の例が、大久保山遺跡であった。その後、齋藤により、浅羽氏、小代氏など幾つかの武士の本拠において同様な景観が復元された(齋藤2006)。その後も各地で臨池伽藍をとまなう武士の本拠が明らかにされてきた。しかし、水源確保は浄土庭園を造るためにあるのではない。取り分け、児玉党諸氏の開発にみられるように、まず復興のための拠点の確保が第一にあることである。

壺丁田遺跡などにみられた水田開発のための灌漑用ため池などは、その後の本拠の整備過程で、本拠の象徴として、臨池伽藍の造営が行われていったのではないだろうか。そして、時代とともに元の機能のみを保持したため池に姿を戻していったと思われる。

それでは、秩父氏の聖地とされる平沢寺遺跡群も、この庄氏や浅見氏の本拠同様に開発拠点として造られたのであろうか。

秩父氏の重要拠点である大蔵館跡には、隣りに寺院跡である宮ノ裏遺跡があり、周辺に宗教施設をつくることに何ら問題はない。平沢寺が聖地とされるが、先の説明で述べたようにあまりに離れすぎているのである。西方浄土の重要性は理解できるが、各地の本拠をみても、すべての本拠において、そのような宗教観が堅持されているわけではない。

それでは、大久保山遺跡などのように開発を前提に平沢寺の空間は成立したのであろうか。平泉では、藤原氏が信仰心と富を背景に、いくつもの臨池伽藍をつくっている。武蔵では最も力のある秩父氏ならば、藤原氏のように、宗教空間に特化した場所をつくることができたであろうか。現状では、どちらの可能性も否定できない。

2 手づくねかわらけについて

最近「中世武士とかかわらけ」という本が刊行された。そのなかで、編者の八重樫忠郎と高橋一樹による対談が掲載されている(八重樫・高橋編2016)。その内容は少々強引なところもあるが、非常に面白い。考古学の八重樫は、平泉を中心とする東国全域の中世前半の土器、陶磁器研究を背景に、いっぽうの高橋一樹は最近の武士団研究などを踏まえ、討論が行われた。そのなかで交通体系や武士団研究を進めるうえで、手づくねかわらけの重要性が取り上げられている。

(1)かわらけの機能と用途

かわらけの機能や用途については、先行研究が極めて多い。そのような研究を少しまとめてみよう。

かわらけ自体にみられる特徴をみてみよう。

例えばかわらけに煤が付着していれば、灯明皿として使用されたことがわかる。また、かわらけに墨書で絵や文字が書かれた墨書土器がある。東松山市青鳥城跡からは輪宝の描かれたもの

が出土しているがこれは地鎮具と考えられ、建物を建てる前に柱の下などに埋めたものであろう。このように墨書土器には地鎮や祭祀に用いられるものが多い。

かわらけの出土状況からかわらけの機能や用途が推測されることがある。よく見られる例が土坑墓内からかわらけが出土する場合である。これは副葬品としてかわらけが使用されたのである。

次に、下田町遺跡のようにかわらけが集中して出土する場合である。平泉では、館を巡る堀の中から数トンという量のかわらけが検出されている。このように一か所に集中して検出された状況は、短期間に大量消費されたものが一気に廃棄されたものと考えられ、その原因は宴会儀礼である。

宴会儀礼は、参会者のなかで交わされる酒盃のやりとりをとおして、主従関係の確認、政治的な合意形成を行う場であり、そこで使用される儀礼の酒盃は一貫してかわらけであった。

このような宴会儀礼の結果として一括に大量廃棄されるものと異なり、他の陶器の播鉢や甕などとともに、井戸や堀から一点、二点とかわらけが出土する遺跡も多い。このようなかわらけは、日常使いの食膳具として用いられたと思える。たとえば、絵巻などにも日常使いとしてかわらけが描かれた例もあり、京都を始めとする関西の研究者の多くは、かわらけを日常的な食膳具として位置づけてきた。

この例にあるようにかわらけのすべてが儀礼的なものと判断できない。しかし、初期の手づくねかわらけの出土状況などを考えれば、その導入は日常使いを前提としたものでないことは明らかである。

(2) 寺社出土のかわらけ

溝や堀内に一括廃棄したものは少し趣を異にする事例がある。それは、寺社に関連した遺跡からの出土である。下田町遺跡から西方2キロメートルほどいくと丘陵となり、その丘陵上に船木神社がある。この神社の移転のため発掘調査を行ったところ神社の下から、過去の拝殿と本殿と思われる建物跡が確認されたのである。そして、その神社遺構の北側を中心に12世紀後半と思われる手づくねかわらけとロクロかわらけが多数出土したのである。

このような神社遺構からかわらけの出土する例としては、諏訪大社上社に関連する磯並遺跡が思い浮かぶ(鵜飼1987)。基壇を伴う建物が確認され、その前のくぼ地がかわらけ溜まりで大量のかわらけが出土している。手づくねかわらけとロクロかわらけを含みその時期は13世紀中葉から後半のことである。詳細は報告書をご覧いただきたいが、大祝の即位などの際に磯並社でも儀式が行われたという。基本的には神と大祝との合意儀礼ともとれる。それと諏訪大社は軍神であり、古くから武家の信仰が篤いことも忘れられない。諏訪大社に関連する遺跡としては、磯並遺跡のほかに御社宮司遺跡、高部遺跡、また霧ヶ峰御射山遺跡などがある。

船木遺跡と諏訪大社を同列で議論することはできないが、この神社において祈願など神との交わりのための儀礼が行われ、そこで使用されたかわらけが神社周辺に廃棄されたのであろう。

そこで手づくねかわらけが使用されている事実からすれば、神社とこの付近の武士との密接な関係の基にこの神社が存在したことはまちがいない⁽²⁾。



第4図 北武蔵の手づくねかわらけ

（3）武蔵における出現期の手づくねかわらけの特徴

武蔵の出現期の手づくねかわらけについては、田中や石川などの論文がある。その論文を参考にして武蔵の出現期の手づくねかわらけの特徴についてまとめると次のようである（田中 2003、八重樫 2014、石川 2016、水口2016）。

① **かわらけの出土遺跡** 出現期の手づくねかわらけは、第5図に示したように、入間川水系の都幾川流域の大蔵館跡や菅谷館跡など嵐山町周辺の遺跡、和田吉野川流域の下田町遺跡、船木遺跡、そして入間川本流域の河越館跡にほぼ限定される。南武蔵では、府中周辺の遺跡で確認されているが、入間川水系で見られる12世紀中葉にさかのぼる手づくねかわらけは発見されていない。

北武蔵の大久保山遺跡、壺丁田遺跡など児玉党に関連する遺跡は、かなり広範囲の発掘調査が実施されているにもかかわらず、手づくねかわらけの出土量はきわめて少ないことがわかっている。

② **かわらけの出土状況** 大量に集中出土した例は下田町遺跡のみであった。河越館跡の遺構でも比較的まとまった量が出土したようであるが、未確認である。それ以外の遺跡では、あまりまとまりをもった出土状況ではない。

③ **出現期のかわらけの特徴** 篩新田遺跡、平沢寺、山王遺跡などの出土品には、手づくねかわらけとロクロかわらけの二形態があり、それぞれ大小二つの法量からなる。手づくねかわらけの大法量の製品をみると、いずれの遺跡のかわらけも体部は二段ナデ整形で、色調は遺跡によってことなるが、灰白色と赤褐色のものが主体である。法量をみると篩新田遺跡、平沢寺遺

跡、山王遺跡のものが15.5センチ前後と最も大きい。河越館跡、下田町遺跡の手づくねかわらけにも15センチ代のものがあるが、14.5センチ前後のものが主体であった。

④ **出現時期** 武蔵の手づくねかわらけの出現はいつのことであったか。最も古いものは、ときわが町新田遺跡出土のもので、それからあまり下らない時期に平沢寺、山王遺跡、河越館跡、下田町遺跡の製品が位置づけられると考えられている。絶対年代は、平泉の志羅山遺跡の手づくねかわらけや京都の手づくねかわらけとの比較からおよそ12世紀中葉(第3四半期)ごろのものと位置づけられている。口径の法量やそれぞれの遺跡成立の歴史的背景などを考えると河越館跡や下田町遺跡の製品はもう少し新しく12世紀後半代の第3四半期から第4四半期にかかる時期と幅をもって考えた方がよいような気もするが、どこまで下げられるのかは判断し兼ねる。

(4)手づくねかわらけ出現の背景

手づくねかわらけの機能のところでも述べたが、宴会儀礼は、参会者のなかで交わされる酒盃のやりとりをとおして、主君と家臣の主従関係の確認の場であり、政治的な合意形成の場であり、そこで使用される儀礼の酒盃は一貫してかわらけであった。

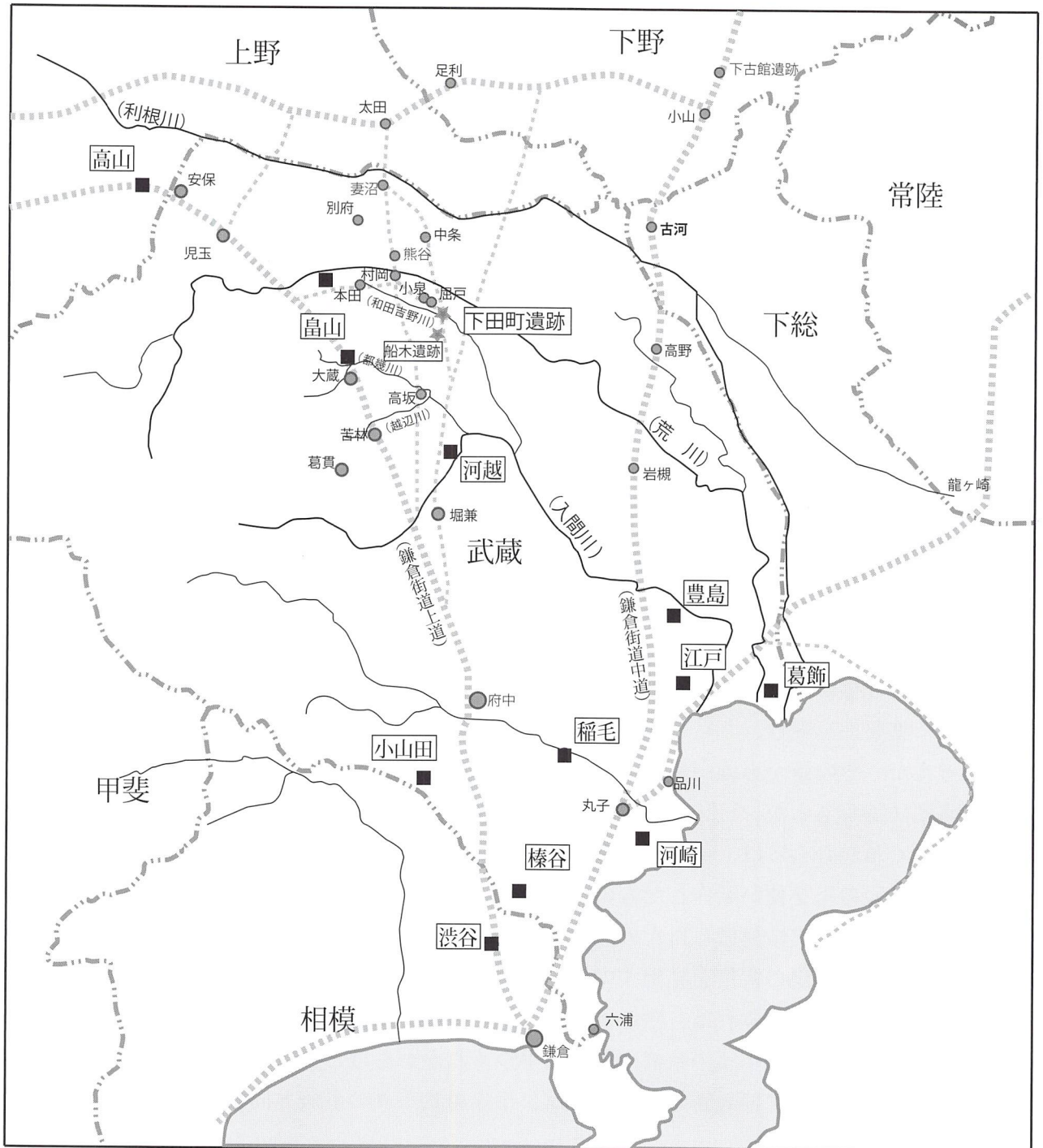
そのような儀礼において京都系の手づくねかわらけを使用するようになったのは、坂東以北では平泉が最も早い段階のことであった。八重樫は、京下りの貴族が、主従関係を結ぶ場における宴会に重要性を説き、さらには京都の手づくねかわらけをもたらし、それを使うことを勧めたと考えた。その証が志羅山遺跡出土のかわらけである。平泉での導入時期は、研究者により多少時期に差があるが、1150年前後でさかのぼっても1140年代のことであったという。この初期の手づくねかわらけは、基本的に京都から製品が大量にもたらされたのではなく、すべて地元工人在地元の土を使い製作したものである。モデルとなる少量のかわらけが京都からもたらされ、その形を忠実に模倣したため法量や二段ナデ整形が、当時の京都のかわらけと一致することから年代と出現の背景を見出すのである(八重樫2014)。

転じて北武蔵の遺跡をみれば、そこから出土する手づくねかわらけは口径の違いはあれ、二段ナデ整形など、12世紀中葉の京都や平泉の手づくねかわらけとほぼ同様な形態であることがわかる。そして大蔵館に源義賢が入ることは、平泉の京下りの貴族と同様な関係を見出すことができるのである。

3 秩父氏と手づくねかわらけ

手づくねかわらけ出現期の遺跡は、入間川水系の都幾川流域の大蔵館跡や菅谷館跡など嵐山町周辺の遺跡、和田吉野川流域の下田町遺跡、船木遺跡、そして入間川本流域の河越館跡にほぼ限定されることを述べた。それらの大半の遺跡が秩父氏の本拠とされる遺跡であることは、先行する手づくねかわらけ研究でも多く語られてきた。

その秩父氏に関連する遺跡と京都系かわらけの受容のルートについて、二人の研究者の見解があるので検討してみたい。



第5図 武蔵国の交通と秩父氏の分布（12世紀後半）

(1) 手づくねかわらけ受容のルートについて

木村茂光は、大蔵館跡や平沢寺出土の出現期の手づくねかわらけは、南武蔵に出土していないことなどから判断して、東山道ルート、京都—東山道—奥大道ルートを想定せざるを得ないのではないかと述べている。さらに、このような推定が可能であれば、東山道の重要性とともに、源為義郎党と子義賢の北関東での動向、秩父氏と義賢との連携、その結果としての大蔵合戦なども関東における武士団の対立としてだけでなく、巨大都市平泉を含めた東国社会全体の中で評価できるというのである(木村2016)。

もう一人の研究者である高橋一樹は、12世紀後半の京都と平泉を結ぶルートとして、東海道を大磯まで来て、そこから相模川を北上して武蔵国府に向かい、さらに武蔵国府から下野小山方面に向かうルートを想定しており、そのルートを行くと、河越付近を通過することはまちがいない。そして、中世前期の東西交通にしる、後期の南北交通にしる、河越は武蔵のなかでも交通の要衝であり、秩父氏の嫡流である河越氏の本拠から手づくねかわらけが出土することは不思議でないとして述べている(八重樫・高橋2016)。

武蔵国府から河越付近を通過するルートは、東山道武蔵路と共通するもので、北に向かうルートの一つが、先に紹介した下田町遺跡を経て、熊谷、妻沼とたどり東山道と合流するのである。

二人の研究者が考えたルートは、どちらも存在したであろう。ただ、手づくねかわらけが商業ベースにのるものでないことは前項の説明で明らかである。そして、先の児玉党の庄氏、浅見氏の本拠は相当な面積を掘っているが、ほとんど検出されていない。そのほか、北武蔵以外の坂東の武士の本拠をみても、12世紀中葉まで遡る手づくねかわらけの出土はほとんど確認されていないのである。そうなる流通のルートを考える上に手づくねかわらけがあるなしは、あまり意味のないことといえる。そして12世紀中葉段階では、むしろ受容する武士たちの儀礼に対する思いの強さであるのかもしれない。しかし、儀礼とは切れない空間である府中に発見されないことは不思議である。

(2) 下田町遺跡の位置と役割

下田町遺跡は、従前からその存在は知られておらず、この遺跡の発見は意外であるとともにその内容には驚くことばかりであった。そのため、歴史的背景などはまったくわからない。そこで、ここではこの遺跡の中世前半の歴史的な位置づけについて検討を試みたい。

河越氏の本拠から北上するルート上に下田町遺跡があることは先にも述べたが、この下田町遺跡について、その自然地理的な視点からまずみてみよう(第5図参照)。

この遺跡から確認された河川跡を和田吉野川と考えた。現在、この川は遺跡の下流で荒川と合流している。しかし、当時の荒川は、第5図に示したように、現在の埼玉県東部の元荒川の流れであった。

和田吉野川は、古代においては入間川水系である。この入間川水系は、ほぼ北武蔵の中央を南北に流れて、東京湾にそそいでいた。その和田吉野川は、入間川水系の最も北に位置する支流であり、さらにその源は、現在の深谷市本田付近であった。本田のすぐ西は、畠山氏の本拠の一つである畠山である。

畠山氏が、男衾郡畠山から府中方面に向かうには、鎌倉街道を菅谷・大蔵を経て南下するルートが一般的と考えられている。

それでは現在の熊谷市周辺の武士たちが南下する場合はどうだろう。先の下田町遺跡の説明で述べたように、下田町遺跡周辺を通過する東山道武蔵路の支道を使い、河越方面に南下するルートが一番近いのである。しかし、河川交通の利用を考えると、男衾郡畠山周辺や大里郡に分布する武士たちには、和田吉野川を利用する方法が極めて有効な手段ではなかったろうか。そのように考えると両方の交通手段が交差する下田町遺跡が、極めて重要な交通の要所とうか

びあがってくるのである。

畠山氏の本拠のある男衾郡から大里郡一帯は、畠山重能、重忠親子により、婚姻関係・水運支配を媒介とした広域的ネットワークを構築し、周辺の武士の統率を進めていたとされる(清水2012)。

畠山重忠の配下の軍団構成員については、青木文彦により詳しくまとめられている(青木2004)。長野、大串、本田、榛沢、柏原、横山、瀬山、津戸などの武士たちが荒川流域を中心に分布しており、その軍団のなかに屈戸の名をみることができる。屈戸は熊谷市屈戸郷と考えられ、下田町遺跡のすぐ北に位置している。

このような畠山氏の軍団の分布を考えると、下田町遺跡と船木遺跡も、畠山氏の勢力下にあったと考えることもさほど無理なことではない。

つまり下田町遺跡は、畠山氏に関連する武士の物流の拠点として設けられたのではないか。そして、大量に出土する手づくねかわらけの出土は、畠山氏に関連する武士の館が構えられていたことを想像させるのである。

おわりに

武士の本拠成立の背景について、幾つかの発掘調査事例を基に説明を行った。一つが街道上に沿う場所や街道と河川交通の交差する要所に成立した本拠である。もう一つが、大久保遺跡や壱町田遺跡の景観に見られるように谷津の開発を前提とした拠点である。

12世紀の本拠成立期において、下田町遺跡で確認された道路跡のような遺構があれば、確実に交通と流通にかかわる本拠を想定できよう。しかし、それ以外に二つの本拠を明確に峻別する特定の遺構・遺物はなかなかあるものではない。基本的に景観が一番有効なものである。水源と本拠のあり方など類例の集積を経て、分析を進めることが重要なことであろう。

武士本拠の発生期の出土遺物として、手づくねかわらけを取り上げた。手づくねかわらけは、武士たちにとって必要不可欠な道具であった。その手づくねかわらけを、北武蔵では秩父氏がいち早く取り入れた。その手づくねかわらけを大量に出土させた下田町遺跡について、秩父氏の一族である畠山氏とのかかわりについて述べた。この点は少し強引であったのかもしれないが、考古学的資料からみた武士の本拠のあり方について一歩踏み出した結果と思っている。

《注》

(1) 小泉郷在家・田注文(『熊谷市史 資料編2 古代・中世 本編』)。大路をはさんで東に16字、西に11字の在家を確認できる。鎌倉街道上道の支道(旧東山道武蔵路、上道下野線)が南北に通る両側に在家が立ち並ぶ町場の景観を復元することができる、という。

落合義明などにより小泉の在家について分析が行われている(落合義明2012、藤原良章 2007)。

(2) 船木神社に関しては、下記のような文書があることを重田正夫氏から御教示いただいた。

近藤圭造編『瓶城翁遺文』(1915年)。吉見村ができた明治22年頃のもので、船木神社のいわれが記されている。

武蔵国大里郡冑山鎮座船木神社華表柱記、代作

繼絶興廢豈可止、況報告于本乎、武蔵国大里郡、有一古里、曰箕輪青山、後分為二村、今又合為一村、改称曰吉見、箕輪之地、有一丘、曰船木山、船木、古曰之船来、蓋山下通舟楫也、古老相伝、上古无邪志国造兄多毛比命、始治足立之府、一葦而航于此、棄船登丘、俯瞰平原日、美哉邦土、因立祠祀所崇素盞鳴尊而去、船木神社是也、物換星移、祠又頽矣、明治維新、百廢俱举、世世衣食于此土者、相議修焉、明神來格、靈威倍加、会堀(掘)丘麓、獲鏡玉瓶瓮、是古之地鎮祭器乎、或祠中宝器也、益信口碑之不可誣也、又議琢石立華表、旁起貞質鑱縁記云、

《引用・参考文献》

- 荒川正夫 2003 「中世城館の成立と地域性」浅野晴樹・齋藤慎一編『中世東国の世界 1 北関東』高志書院
- 青木文彦 2004 「江南町史 通史編 上巻」江南町
- 浅野晴樹 2010 「中世北武蔵の成立期から前期について」『歴史評論』727
- 浅野晴樹 2015 「下田町遺跡」熊谷市『熊谷市史 資料編一 考古』
- 飯村 均 2016 「奥羽からみた関東」埼玉県立嵐山史跡の博物館編『検証！古代から中世へ－東国の視点から－』
- 石川安司 1995 『新田遺跡Ⅱ』玉川村埋蔵文化財調査報告第9集
- 石川安司 2016 「12世紀後半の北武蔵の手づくねかわらけ」鎌倉かわらけ研究会『鎌倉かわらけの再検討』
- 鶴飼幸雄 1987 「磯並遺跡」茅野市教育委員会
- 岡陽一郎 1995 「中世居館再考－その性格をめぐって－」五味文彦編『中世の空間を読む』吉川弘文館
- 小野正敏 2004 「中世武士の館、その建物系譜と景観」小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『中世の系譜』高志書院
- 落合義明 2012 「秩父平氏の本拠を探る」『秩父平氏の盛衰』勉誠出版
- 落合義明 2012 「武蔵国と秩父平氏」清水亮編『シリーズ・中世関東武士の研究第7巻 畠山重忠』戎光祥出版
- 鎌倉佐保 2003 「浅間山大噴火と中世荘園の成立」浅野晴樹・齋藤慎一編『中世東国の世界 1 北関東』高志書院
- 鎌倉佐保 2016 「北武蔵の武士の本拠地の成立とその背景」埼玉県立嵐山史跡の博物館編『検証！古代から中世へ－東国の視点から－』
- 木村茂光 2016 「頼朝と街道」吉川弘文館
- 熊谷市教育委員会 2013 「熊谷市史 資料編2 古代・中世 本編」熊谷市
- 恋河内昭彦1998 「向田A・向田B・壱丁田遺跡」『児玉町文化財調査報告書』第27巻
- 埼玉県立歴史資料館 1983 「歴史の道調査報告書鎌倉街道上道」
- 齋藤慎一 2006 「中世武士の城」吉川弘文館
- 清水 亮 2012 「武蔵国畠山氏論」清水亮編『シリーズ・中世関東武士の研究第7巻 畠山重忠』戎光祥出版
- 高橋 修 2003 「武蔵国における在地領主の成立とその基盤」浅野晴樹・齋藤慎一編『中世東国の世界 1 北関東』高志書院
- 高橋 修 2014 「熊谷氏と熊谷郷をめぐりいくつかの論点」『地方史研究』370号
- 田代 隆 1995 『下古館遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第166集

- 田中 信 2003 「武蔵の在地土器供膳具」『中世東国の世界 1 北関東』高志書院
- 田中大喜 2015 「新田氏一族の中世」吉川弘文館
- 野口 実 2002 「豪族武士団の成立」元木泰雄編『日本の時代史 7 院政の展開と内乱』吉川弘文館
- 野口 実 2003 「中世成立期における武蔵国の武士について－秩父平氏を中心に－」岡田清一編『第二期関東武士研究叢書4 河越氏の研究』
- 林 宏一 1974 「藤原守道の経筒」埼玉県立博物館紀要 1
- 藤原良章 2007 「中世の都市とみちをめぐる」藤原良章・飯村均編『中世の宿と町』高志書院
- 水口由紀子 2016 「武蔵・下野の土器」八重樫忠郎・高橋一樹編『中世武士と土器』高志書院
- 峰岸純夫 2008 「大蔵合戦と武蔵武士」埼玉県立嵐山史跡の博物館編『東国武士と中世寺院』高志書院
- 峰岸純夫・能登健編 1989 「浅間山火山灰と中世の東国」『よみがえる中世 5』平凡社
- 村上伸二 2008 「嵐山町平沢寺と周辺遺跡」峰岸純夫監修『東国武士と中世寺院』高志書院
- 八重樫忠郎 2014 「平泉と鎌倉の手づくねかわらけ」藤原良章編『中世人の軌跡を歩く』高志書院
- 八重樫忠郎 2016a 「平泉と鎌倉のかかわり」鎌倉かわらけ研究会『鎌倉かわらけの再検討』
- 八重樫忠郎・高橋一樹編 2016b 「中世武士と土器」高志書院